

光源氏の「反省」

上野 辰義

一 はじめに

二 「反省」という行為

三 中の品の女

四 夕顔の契り

五 反省と自制

折口信夫が、「反省の文学源氏物語」で説いたように、光源氏は、ある時点から自己の人生を反省し、それとともに、阿部秋生氏が「六条院の述懐」（『光源氏論』）で検証したように、半生を回顧し、述懐するようになる。それらの様相は、彼自身による人生把握のありようと、人間性の変化と深化、物語の展開と質の理解に大きく関わり、それらを理解する鍵となる事柄であると考えられる。本稿ではとりあえず、それらの内、光源氏における反省の生起について、その当初の様相を検討したい。

一 はじめに

折口信夫は、「反省の文学源氏物語」^①という文章を、昭和二十五年七月の『婦人之友』に掲載した。そこで折口は、光源氏が、昔の日本人の理想を体現すべく、大きく広く、最も人間的な、神と一重の境まで行ったのに引き返し、四十を過ぎて、柏木を手を下さずに、死に至らしめて、人間の悲しさを示すなど「光源氏の一生には、深刻な失敗も幾度かあったが、失敗が深刻であればある程、自分を深く反省して、優れた人になつて行つた」、そして読者である「我々は此物語から、人間が大きな苦しみ能耐へ通してゆく姿と、人間として向上してゆく過程を学ばなければならぬ」と書いた。光源氏と源氏物語を不道德なものとする見方に対して、人生の修行の過程でおかしたあやまちを反省して、神に近づこうとする向上心を見るべきだとしたのである。

実際、光源氏は、ある時点から自己の人生を回顧し反省し、述懐するようになる。女三宮宛ての柏木の手紙を発見して、二人の密通を知った光源氏が、「故院の上も、かく御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせ給ひけむ、思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじきあやまちなりけれ」(若菜下^②一一九九)、と二人の密通を自身

と藤壺の密通に重ねたのは、その代表的なものであろうし、こうした反省は、若菜下巻での女葉の後、紫上に語った「みづからは、幼くより、人にことなるさまにて、ことごとくしく生ひいでゝ、今の世のおぼえありさま、来しかたにたぐひ少なくなむありける。されど、又、世にすぐれて悲しき目を見るかたも、人にはまさりけりかし」(一一六三)という自らの半生の回顧と密に絡み合いながら、光源氏の内面の自照性を深く強固にし、最終的には紫上他界後の御法巻と幻巻の二つの述懐に繋がっていくものであるだろう。^③

このように、光源氏の反省は、「此物語のもとだち」(源氏四十八ものたとへの事^④)である光源氏のそれとして、彼自身による人生把握のありようと、人間性の変化と深化、物語の展開と質の変様に大きく関わり、それらを理解する鍵となる事柄なのである。

では、このような、光源氏によるおのれの人生の回顧と反省は、いつ、どのようにして始まり、どのように変転を重ねながら深化し、晩年の諸回顧・述懐に繋がっていくのであろうか。

本稿ではとりあえず、こうした、光源氏における反省行動の発生当初の形態とその内容を、確認しておきたい。

二 「反省」という行為

ところで、自己の人生を振り返る「回顧」と、自己の思いを述べる「述懐」はともかくとして、「反省」とはどのような捉えておいたらよいものなのであるうか。例えば、『広辞苑』（第六版）では、「反省」の語釈に「①自分の行いを省みること。自分の過去の行為について考察し、批判的な評価を加えること。②〔哲〕(reflexion) 自己の内面的な精神生活または心的状態に意識とくに注意の作用をむけること。（以下略）」とし、『日本国語大辞典』（第二版）では、同じく「①自己の過去の言動についての可否、善悪などを考えること。自分の行為をかえりみること。（用例略）②心理学などで、単に外的事物を認知するだけでなく、すでもっている経験・知覚・観念の關係に注意し、問題の解決を求めて思考すること。」と記述する。『広辞苑』では用例を挙げていないが、『日本国語大辞典』（第二版）では、①に、一八七一年の『新聞雑誌』二五号と一八七四年の『公益熟字典』等の例を挙げ、見出しを掲載する辞書として『言海』（一八八六年成稿、一八八九年～一八九一年刊）を挙げる。明治期を遡る例示がない。『漢語大詞典』を検しても、「反省」の用例の最初に、民国の劉復（劉半農）の「半農雜文」（民国二三「一九三四」年刊）自序

のそれが挙げられ、事情は変わらない。その事情は、『和英語林集成』や『哲学字彙』でも同様だが、『和英語林集成』では、第三版（一八八六年刊）に至って、和英の部に「Hansei ハンセイ 反省」を初めて掲げ、その訳語として「Self-examination; introspection」を掲げる。逆に英和の部には「Self-examination」の見出しはあるが、訳語は「Mizukara kayeri-miru」であり、「反省」ではない。だが、意味は同一の扱いである。（ちなみに、初版は「Kayeri-miru」、再版は「Midzukara kayeri-miru」とある。また「Introspection」については、初版・再版・第三版ともに、見出しとして掲げていない。）これに対して、『哲学字彙』（改訂増補、一八八四年）では、「Reflective Power」および「Reflection」に、ともに「反省力」の訳語があてられる。（ちなみに「Introspection」には、「内省」の訳語があてられ、「Self-examination」の見出しはない。）このような状況から、「哲学字彙」の「反省力」の訳語は、おそらく「新プラトン派のプロクロス以来」の「知性が反転して自己に向かう作用 (intentio oblique)」(『岩波哲学・思想事典』「反省」の項、新田義弘氏執筆) のごとき意味を土台として、哲学における reflection 等の訳語として、用いられ始めたものらしく、『言海』における「反省」（語釈「己が身ノ上ヲカ

「ヘリミルコト」、『和英語林集成』における「反省」（和語「mizukara kayeri-miru」）、『漢語大詞典』における「反省」（語釈「回想自己的思想行為。検査其中的錯誤」）等とは、用法の差を有している。だが、『岩波哲学・思想事典』「反省」の項に、ロックのいう「〈経験的反省〉は内観（introspection）の方法として、認識心理学の方法として効力を発揮した。この反省の方法的性格が十七世紀に、とくに英国やフランスで一般化されて、日常語のなかで『熟考する』とか『再思考する』態度を言い表わす語として広く使われるようになった」といつていることからすれば、今は詳細をつまびらかにできないが、日本語における一般的な意味用法の「反省」と、哲学・心理学の術語としての「反省」との間にも、そうした西欧における用法の展開と関連・対応する形で、語義の派生や連関に当然脈絡が存在するだろう。

以上のごとき「反省」をめぐる事情を、平安時代で確認しておけば、東大史料編纂所のデータベース（平安時代関係）（峰岸明編『平安時代記録語集成』も参照）、六国史・律令・延喜式等にも「反省」の語は基本的に見いだせない。源氏物語など主だった仮名文学作品においても同様である。従って、平安時代の作品である源氏物語の内容に、現代のわれわれが想起するような「反省」の概念をそのまま見い

だそうとするのは本来無理というべきだが、平安京という都市とその近郊で社会生活を営み、個の意識も深化した貴族層の人々の心理に、「反省」とある程度似た、相当するものを見いだそうとする試みは、許されると思われるし、検証する意味は十分ある。登場人物の内面・心理を意識して書かれている（語られている）源氏物語においては、特にそれがかなりの部分可能であるだろう。折口が光源氏の人生に「反省」を見たのも、こうした事情に基づいていると、見ておいてよい。

しかも、「反省」という語自体は、平安時代において見いだしがたくても、『和英語林集成』の「反省」の和語に「(mizukara) kayeri-miru」、『言海』における「反省」の語釈に「己が身ノ上ヲカヘリミルコト」と「かへりみる」が揚げられていた。この「かへりみる」は、例えば、『日本国語大辞典』（第二版）に「4わが身を反省する。」として、大慈恩寺三藏法師伝承徳三年点（1099）以下の例を挙げているように、語脈と時期に留意が必要だが、平安時代に「反省」と同義を持ち得たかと思われる。実際、源氏物語にも、「身をかへりみるかた、はた、ましてはかばかりからぬ恨みをとどめつる、おほかたの嘆きをばさるものにて」（柏木）、の口語訳を、「反省すると、それ以上に、つまらない恨みを後に残す、という嘆きひととおりは別に

して」(玉上琢彌訳注角川文庫源氏物語)とする例がある。もっとも、これは柏木の発話で、光源氏のものではなく、かつ「反省(する)」と訳すことができそうな「かへりみる」「かへりみ」「かへりみがちなり」「かへりみす」の例は、源氏物語にはもうないが。また、「かへりみる」と同様に、「反省」と意味的に関わる語は他に、「悔ゆ」が存在する。『日本国語大辞典』(第二版)は、語義分類することなく、「自分のやったことを、あとになって良くなかった、ああすればよかったなどと、くやしく思ったり反省したりする。後悔する。悔しく思う。」(「悔いる」の項)と語釈する。「悔ゆ」を含め「反省する」と訳されることはあまりないが、同類の語に、「悔しい」「悔し」「悔しげなり」「悔しさ」など、一連の派生語がある(源氏物語に「悔やむ」「悔やみ」の例はない)。例えば、「今も昔も、なほざりなる心のすさびに、いとほしく悔しきことも多くなむ」(若菜下)など。他にも類語があるかもしれない。このように、「反省」という語自体は用いられなくても、それが示すのと同様の意味、行為は他の語句によって表現されていたのかもしれないと思われる。

では、「反省」という行為は、どのような行為なのだろうか。現在われわれが、一般的・日常的に用いる「反省」の意味は、前掲の『広辞苑』『日本国語大辞典』(第二

版)ともに①「あたりの理解であろう。過去の自分の行いを振り返り、その良し悪しを判断し、さらにはそれをその後の自分の言動の糧とすることだろう。この反省は、「人は、成功したときには、なぜ成功できたのか、あまり考えようとはしない。失敗したときに初めて目が自分の内部に向き、その原因を考えるものだ」と言われるように、多くは人生で何かに失敗したときに、その原因を考え、反省するものだが、現在の心理学、特に社会心理学では、「人々の行動の原因を説明する過程」(『有斐閣心理学辞典』『社会知覚』の項)を「帰属」という。その際、その失敗の原因を、日本人は、個人をとりまく他者や状況に求める(外的帰属)よりは、個人の気質や能力など内的なものに求めて(内的帰属)、努力が足りなかったとか、能力がなかったとか、考えやすい(欧米人では、外的帰属が優勢である…帰属理論 attribution theory)。源氏物語における反省を取りあげた折口の前掲の文章も基本は、光源氏の人生の深刻な失敗と、光源氏自身の内的な原因帰属に目を向けている。加えて折口は、光源氏の反省に関して、柏木事件を念頭において、次のようにも言う。彼の過去の行為についての「失敗が深刻であればある程、自分を深く反省」する内的な反省と、因果応報というような当時の普遍的モラルによって惹起されるさまざまな事件などが、光源

氏に反省を強いる「外からの刺戟」(失敗の原因を外部に求める外的帰属のことではない)とが重なっている、と。

折口は、この光源氏における内的反省と外的刺激の重なりを、源氏物語の「書き方」、構成法として捉えたのだが、

中本征利氏は精神分析学の立場から、同じく女三宮密通に遭遇して抱いた前掲の若菜下巻におけるがごとき光源氏の思いについて、「自己の所行の真なる反省は他者の中に自己を見えることにおいて始まり」、「自己を被害者の立場において痛みを感じ得た時、しかもその所行が自分のなしたことと同一であると感ぜえた時、自己の行為の加害性への反省が生じ^⑥」るのだ、と述べる。つまり、逆転した立場で同じ体験に遭遇し、自分も過去の行為の対象者と同様に傷ついた時、深い反省が起こるという点で、折口と中本氏とは通じ合う。さらに、折口が、外から光源氏に深い反省を迫っているように感じられる書き方の例として、他に、冷泉帝への宮仕えを間近にした玉葛が鬚黒に奪取された事件を挙げて、折口は明示していないのだが、このことに過去の藤壺や夕顔、紫の君や朧月夜との体験の因果応報的な重なりを想起しているやに思われるごとく、この反省の仕組みにも、一方で藤壺密通―女三宮柏木事件のようなものを極として、他方に、この極の仕組みから見れば矮小化された、過去の自分の過失・失敗についてかえりみ、方向としては

それを悔い改めていくような動きを持つ、より深刻度の低い、日常的な反省の形態との間に、程度・質の差異を示す幾つもの段階が連続的に当然に存在することだろう。そのような差と広がりを持つ反省自体の個々の認定については、さらに回顧・述懐との連繫・共起の問題もからみ、判断に困難な点もあろうが、折口や中本氏が指摘した、こうした光源氏における内的帰属とそれを強いる外的圧力との重なり、自己と他者の相通の濃淡、それらの存在の有無についての自覚に留意しながら、光源氏における反省のそもそもの起こりと、その様態をみていこうと思う。その際、語としては、使用されていなくてもよいが、「かへりみる」、「悔ゆ」、それらの派生語などにも注意することとなる。そして、あくまでも大事な点は、客観的な外部の状況の中で、光源氏の主観がどのように思惟し判断したかということ、彼の心的傾向をさぐることである。

三 中の品の女

まず、光源氏による早い段階での反省に結びつくものとして思い浮かぶものは、帚木巻で、方違えに出かけた中川の紀伊守邸での、空蟬方の侍女たちの光源氏に関わる噂話に対する光源氏の反応であろう。

「いといったうまめだちて、まだきにやむごとなきよす

が定まり給へるこそ、さうごうしかむめれ」、「されど、さるべき限にはよくこそ隠れありき給ふなれ」など言ふにも、おぼす事のみ心にかゝり給へば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時、などおぼえ給。

（帚木六五）

ここでは、秘匿すべき藤壺（と判断される）との関係が噂されるのを耳にしたら、と「胸つぶれて」恐れている。藤壺への恋情を抱くのみでなく、「さるべき限にはよくこそ隠れありき給ふ」に想起される藤壺への接近の試み、ないし忍び歩き（既に密会を果たしている可能性がある）の露見が自分を制裁することになる貴族社会への恐れと、その因である恋情に対する自責の意識とを光源氏の心中に想定できる。しかし、この箇所自体は、藤壺との醜聞を現実光源氏が耳にしているわけではなく、光源氏の女性交渉の一面が噂されただけなので、現実の反省の場にはなりきっていない。反省の種子を蒔きながら可能態であることによつて最終的な反省に追い込まれず、余裕を残している。

ついで、この直後に光源氏が遂行した空蟬との密通に関しては、この後、上京して光源氏のもとに挨拶に来た空蟬の夫伊予の介を前にして、「あひなくまばゆくて御心のうちにおぼしいづる事もさまぐなり」（夕顔一〇八）と語られる。ここでは、密通したことに関する夫へのばつの悪

さ、空蟬が自分を拒み続けることによつてさまざまな思いが光源氏にもたらされていることが示される。空蟬の夫である伊予の介を前にして「あひなく、まばゆく」思つたのは、中の品とはいえ、人妻と通じることが人倫に悖る行為であつたからである。そのことは、この伊予守との対面の直前に、

かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人にはたがひておぼすに、おいらかならましかば、心苦しきあやまちにてもやみぬべきを、いとねたく、負けてやみなむを、心にかからぬをりなし。

（夕顔一〇七）

と、中川での空蟬との一夜を、「心苦しきあやまち」と自覚していることから明らかである。

だが、この、空蟬の夫伊予守と対面した際に光源氏が感じた、まばゆき、良心の責めは、光源氏の空蟬への行動を抑制するものとはなっていない。前掲の光源氏の空蟬に対する感慨にあつたように、中川の一夜以後、光源氏を拒み続ける空蟬に、光源氏は肉体的な征服心を抱きつづけたからである。これは、予想外の空蟬の光源氏拒絶の連続に（かの空蟬のあさましくつれなきをこの世の人にはたがひておぼすに）、帚木巻頭の「まれにはあながちにひきたがへ、心づくしなることを、御心におぼしとどむる癖なむ、あやにくにて」（三五）作用し、「いとねたく、負けてやみ

なむを、心にかゝらぬをりな」き状態に陥り、拒絶されて一段と征服欲をかきたてるという、「さるまじき御ふるまひもうちまじ」った結果なのである。

空蟬が光源氏を拒み続けている理由も、光源氏は、密会当夜の空蟬の次の言葉によって知っている。

「いとかく憂き身のほどの定まらぬ、ありしながらの身にて、かゝる御心ばへを見ましかば、あるまじきわが頼みにて、見なほし給ふ後瀬をも、思ひ給へ慰めましを、いとかう仮なるうき寝のほどを思ひ侍るに、たぐひなく思う給へまどはるゝなり。よし、今は見きとなかけそ」とて、思へるさまげにいとことわりなり。

(帚木七一)

空蟬は、中の品の後妻に成り果てたわが身の境遇を受け入れるしがなく、光源氏との今夜の仮初めの浮ついた情事に困惑していた。この時の空蟬の思惟は、その後も基本的に変わらない。

にもかかわらず、光源氏が、空蟬に接近し続けるのは、予想外に拒まれ続けてあやにくな癖が発動して肉体的な征服欲が高まったからのみならず、空蟬が、その後も光源氏と消息・和歌を贈答し、精神的には光源氏を拒んでいなかったからでもある。例えば、光源氏が五条の女夕顔に関心を向けようとしていたときにも、空蟬は、

さすがに、絶えて思ほし忘れなむ事も、いと言ふかひなく憂かるべきことに思ひて、さるべきをりをりの御いらへなどなつかしく聞こえつゝ、なげの筆づかひにつけたる言の葉、あやしくらうたげに、目とまるべき節加へなどして、

(夕顔一〇八)

光源氏が、空蟬を「あはれとおぼしぬべき人のけはひなれば、つれなくねたきものの、忘れがたきにおぼす」効果をもたらしていたし、夕顔を某院で亡くして、光源氏がその後三十日程体調を崩し病に沈んでいた間、空蟬には小君を介した光源氏の伝言も以前のようにはなく、空蟬は、伊予下向も迫る心細さに、光源氏の気持ちを知りたくて、見舞いの手紙と歌を、女の空蟬から贈っている。このように、空蟬は、精神的には光源氏を受け入れていたから、光源氏を肉体的に拒んでも、そのことが光源氏を空蟬から遠ざける力にはならなかったのである。

ちなみに、立冬の日、空蟬が伊予に下向する際、死別した夕顔をも思いつつ、光源氏が、「過ぎにしもけふ別るゝも二みちに行くかた知らぬ秋の暮れかな」と詠歌した後、「なほかく人しれぬことは苦しかりけりとおぼし知りぬらんかし」(夕顔一四六)と語られる。これは語り手の推測であり、光源氏の気持ちがこのとおりであったとしても、それは、夕顔を死なせて事件そのものを葬った体験を含

んだ、秘密の恋の危険さ、苦しさを主要には指摘するものだ。光源氏のもとに家臣の礼をもつて出入りする身分差のある伊予介の後妻と通じたことが、周辺と世間に知られても、義兄弟である頭中将の妾の一人で、頭中将の子も設けている夕顔と通じ、それを死なせてしまったスキャンダルと較べれば、空蟬との一件は、光源氏にとって小さな傷でしかなかったらう。

空蟬との密通に関する光源氏の意識は、以上のとおりであるとしてよい。中の品の人妻に通じたことを、「あやまち」と認識はしたが、通常なら一夜で終わるところ、空蟬の強い肉体的拒絶に征服欲を募らせ、精神的には空蟬と通じているこの二つの力の堂々巡りの内に、光源氏の夕顔との交渉、空蟬の伊予下向が起り、外部の力でこの動きは中断する。であるから、光源氏のこうした言動の中に、真摯な反省は見いだせない。

また、空蟬の継娘軒端萩との顧末をみると、光源氏は彼女を中流貴族としての品格が不足していると見ていたが、一方彼女の「にぎははしう愛敬づきをかしげなる」(空蟬)様子には終始魅力を感じている。しかし、空蟬の代わりとして最初に彼女と契った時も、若く幼い思慮に、「憎しとはなけれど、御心とまるべきゆるもなきこゝち」(空蟬)がしてさほど心も惹かれなかった上、当面の本命である空

蟬への気遣いから、後朝の文を送らないなど、軒端萩には十全の対応をせずにした。通い続けて結婚する意志はないのである。父伊予介の伊予下向に際し、軒端萩を縁付けようとする動きにも、光源氏は、夫ができて軒端萩は自分と通じるだろうと自信を持っており、蔵人少将を夫としたと聞いても光源氏は文通を続け、少将が光源氏の手紙を見つけて、自分より先に妻と通じた相手が光源氏だと知ったなら、「さりとも罪許してん、と思ふ御心驕りぞあひなかりける」(夕顔)と、語り手から批評されるように、驕りからくる粗略な扱いを続けていた。そうした扱いを受ける軒端萩に申し訳ない思いは抱くが、その後も、空蟬と碁を打つ場を垣間見たときの「火影の乱れたりしさまは、またさやうにても見まほしく」(末摘花)思ったとあるように、人妻となった軒端萩の立場への顧慮は薄く、光源氏は、彼女と自分に甘えていた。このような光源氏に、軒端萩との関係を心から反省しようとする姿勢は生起しがたいものであったろうし、その姿勢を呼び起こし、または強いる外的な圧力も両者の社会的な力の差を考えれば発生しがたいものであった。そして実際に、軒端萩を粗略に扱うことに對するいとおしき、哀れさは思っても、軒端萩との関係に自身の非を自覚する明確な言辞は光源氏に見いだせない。その背景には、「心あらむと」(空蟬)見えて、光源氏との

密事を当初から拒み続けた、故衛門の督の娘である空蟬と、「すこし品おくれ」（空蟬）、「ぬし強くなるとも、変わらざうちとけぬべく見え」（夕顔）た伊予介の娘である軒端萩との、光源氏の心中における軽重の差が関わっているだろう。

このように、十七歳時夕顔との出会いが語られるまでの光源氏には、藤壺宮への接近や、空蟬との心較べ、軒端萩への粗略さと驕りなど、客観的には彼女らに関わって反省すべき状況・行動は存在しながら、反省と見なすべき明確な言動は見いだせない。

四 夕顔の契り

光源氏は夕顔を某院に連れ出し、そこで夕顔を物の気に気取られた。この失敗を光源氏はどのように反省しているのか。五条なる大路でその存在を知り、素性を調べさせて通い始め、某院に連れ出すまで、光源氏は、夕顔との交渉を、自分でも制御も理解もできない程に思い詰めていた。

そして、女への鎮めがたい思いから、夕顔を光源氏の本邸である二条院に迎えてしまおう、それが世間から非難されても、それも運命だろう、今までこれほど女にのめり込むことはなかったのに、どんな因縁があったのだらうとまで思う（夕顔）。ここには周囲に目を向けつつも、非難覚悟

の光源氏がいる。世間より自分の魂にとつて大事な女の価値の方を選んでいる。これはやはり、ある意味冷静さを欠いているというべきだろう。

だが、外部への目が全くなっていたわけではない。某院では、夕顔と濃密な時間を過ごしつつも一方で、

内にいかに求めさせ給らむを、いづこに尋ぬらむとおぼしやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらむ、恨みられむに苦しいことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえ給。

（夕顔一二二）

と、父帝や六条御息所らの現況を推量して、自分の行動の不適切さを自覚している。従つて、物の気に夕顔を気取られ、惟光が来るのを待つ間、「なごてかくはかなき宿りはとりつるぞと、悔しさもやらんかたなし」（夕顔一二六）と後悔する。これは失敗の原因を考える反省の開始である。そして、鳥の声が聞こえて、夜明け近くになり、少し余裕もできたのか、こう思う。

からうして鳥の声はるかに聞こゆるに、命をかけてなにの契りにかゝる目を見るらむ。わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来しかたゆく先の例となりぬべきことはあるなめり。忍ぶとも世にあること隠れなくて、内にきこしめさむを始め

て、人の思ひ言はむこと、よからぬ童への口ずさびに
なるべきなめり。ありありて、をこがましき名を取る
べきかな、とおぼしめぐらす。 (夕顔一二六)

命に係わる今回の体験・失敗は、こうした秘密の女性関係で、身分不相応に抱いてはいけない料簡（藤壺への思い）の報いとして、空前絶後の語り草となる規模でもたらされたのだらう、と思う。「現在の恐ろしい体験が、源氏の心に罪の意識をよび起こした」（日本古典文学全集本一一六九頁頭注）というのだが、光源氏は、藤壺に対して不埒な思いを抱いているのみならず、帚木巻頭以前に逢瀬自体を持っていた可能性があった。そうしたことから注意すべきは、藤壺への不埒と今回の夕顔の頓死とに、光源氏が因果を見ていることである。光源氏は、この時点ではまだ明確に判定できていないが、夕顔を雨夜の品定における頭中将の妻の一人常夏の女ではないかと疑っている。（事実はそのようであった）。密通関係が潜んでいるのである。すると、この因果は、既に言及した、若菜下巻における、光源氏の認識、光源氏と藤壺の密通の報いとして、柏木と女三宮の不義がもたらされた、という意味と対応するのである。その因は、どちらも藤壺との不埒・不義であり、父桐壺帝以下に知られることを畏怖したり、既に知られていたのではないかと恐れている点も共通する。異なる点は若菜

下巻では、過去の過ちの真逆（妻を寝取られる）をわが身で体験するのに対して、夕顔巻では、妻を寝取る事件は対頭中将の関係で光源氏が行為者として再現するが、その事実はこの時点ではいまだ可能態として潜んで表に出ず、表面は光源氏が、愛人を物の氣に奪い去られる（寝取られるの類比）、という形になっていることである。いまだ明確でない頭中将との繋りを措いておくなら、「上が上を選りいでゝもなほあくまじく見え給ふ」（帚木）光源氏が、「下が下と、人の思ひ捨てし住まひ」に住む「下の品ならめ」（夕顔）と推量される女に入れこんで関わりを持ち、逢引の最中に死なせたという、藤壺の場合とは逆方向の「おほけなくあるまじき心」が、ここでは対応していることになる。ともあれ、夕顔の頓死事件を、藤壺との不埒（不義）の因果と意識していることが大事だらう。

だが、光源氏は、なぜ、夕顔の頓死を、「かゝる筋におほけなくあるまじき心の報い」、すなわち藤壺への不埒の心との因果で捉えたのだろうか。光源氏の心に沿って考えるなら、その時、遠くから聞こえてくる鶏鳴が夜明けの近づくのを知らせる中、「命をかけてなにの契りにかゝる目を見るらむ」と光源氏は思っていた。「命をかけて」とは、この時、某院の物の氣が夕顔を取り殺したものの、実は、後に夕顔の四十九日の法事をした次の夜、光源氏がその時

物の氣と夕顔のさまを夢に見て、「荒れたりし所に、住みけむものの、我に見入れけむたよりに、かくなりぬること」(夕顔一四五)と思つていたように、物の氣出現の理由は光源氏自身にあり、夕顔はその巻き添えに頓死したもので、本来は自分の命が危うかったということ、そして「なにの契りに」このような、物の氣が出現して夕顔が取り殺されるという状況がもたらされたのか、その因縁に心を向けていたということだ。

ここで取り殺される夕顔との宿縁については、光源氏はこれ以前からずっと凝視していた。夕顔に自分でも不可解なほど惹きつけられて、世間の非難を受けてもそれも運命夕顔を二条の院に迎え入れようとまで思い詰めて、「我心ながらいかく人にしむ事はなきを、いかなる契りにはありけむなど」(夕顔一一五)思うようになっていたし、某院に赴く当日の夜明け近く、五条の隣家で御嶽精進する翁の声を聞いて、将来に向けてだが、夕顔との深い契りを意識して贈歌していた。

(源氏) 優婆塞が行なふ道をしるへにて来む世も深き契りたがふな

(夕顔) さきの世の契り知らるゝ身の憂さにゆくすゑかねて頼みがたさよ

(夕顔一一八)

夕顔の死後も、病状の回復後、九月二十日の頃、右近に夕

顔の素性を聞いた時も、光源氏は、死別に至った夕顔との交渉を回想して、

はかなかりしゆふべより、あやしう心にかゝりて、あながちに見たてまつりしも、かゝるべき契りこそはものし給ひけめと思ふも、あはれになむ。(夕顔一三八)

と、尋常でなかった夕顔との因縁を思っている。だから某院で物の氣が出現して夕顔を取り殺し、本来光源氏自身にも死の危険があつた時、これを招いた因縁に夕顔との宿縁をまず想起したことは、自然な成り行きであろう。そして、夕顔とこのような死に関わる状況に至った因縁として、「わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来しかたゆく先の例となりぬべきことはあるなめり」と因となりうる自己の最大の過ちである藤壺との件を推量することになる。既に中川の紀伊守邸で、藤壺接近の秘密が露見することに胸つぶれていた(前述)。義兄弟である頭中将の妾との密通という真相はまだまだ陰に隠れているが、下の品と思われる女性に身分を超えて自制が効かないほどに入れ込んで、世間の非難を得る状況にいる点は、藤壺の場合と通じるのである。具体相は異なるが、そうした共通点によって、夕顔の頓死体験に、藤壺との交渉の因果応報を、光源氏は観じたのである。

そして、その結果、

忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏にきこしめさむを始めて、人の思ひ言はむこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり。ありありて、をこがましき名を取るべきかな、とおぼしめぐらす。(夕顔一二七)と、この醜聞が、「来しかたゆく先の例となりぬべきこと」を思い、将来の制裁を予測する。

こうしてここには、身辺の違いを無視して入れ込んだ女を物の氣に気取られて、世間の非難を浴びることになるだろう、と予測された夕顔との交渉の失敗の原因を、光源氏自身の藤壺への不埒な料簡との対応に求める、彼の反省が認められる。このことは同時に、光源氏が藤壺との交渉を反省、あるいは既に反省していることを現しており、それゆえ、ここで藤壺と重ね合わされる夕顔は光源氏にとって、藤壺の影的存在であるとみなされ、藤壺のゆかりである紫君と相對する存在となるのである。

五 反省と自制

細野はるみ氏は、「おほけなし」が出現する、この夕顔頓死と藤壺との不倫不埒との因果応報を観じる箇所を、「いわゆる若紫系と帚木系の物語の連絡を図った部分」で、他の光源氏と藤壺の密通に関わる箇所における「おほけなし」の用法とは、「やや異質である」と言われる。⁽⁹⁾氏の指

摘はそれでよいとして、異質に感じられるというのは、この部分が、藤壺と夕顔との二つの交渉を重ねて、因果の法により光源氏の反省が語られる大がかりな箇所であるからであろう。

この後、若紫巻に至って、光源氏は北山の僧都の無常を説く言葉に、

わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生ける限りこれと思ひ悩むべきなめり、まして後の世のいみじかるべき、
(若紫一六〇)

と、思い続けて、出家生活を望ましく思ったりしている。

ここで光源氏は、わが罪、すなわち、この後の巻で語られる藤壺との密通時に、藤壺が「宮もあさまじかりしをおぼしいづるだに、世ともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむ、と深うおぼしたるに」(若紫一七三)とあるところから、既に若紫巻以前に藤壺と密通していたことに關わりと判断される、その罪の深さを恐ろしく思い、藤壺への愛執に、生涯悩み続け、その報いを来世に得るのだらうと、思っている。この認識は、細野氏が言われるように、夕顔巻の夕顔頓死時の光源氏の反省「わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心」と、連続しているのである。

だが、問題は、光源氏が既に藤壺との罪をこのように意

識していながら、以後も藤壺への思いを自制できず、再び逢瀬を持つてしまうことだろう。こうした光源氏の心的傾向は、藤壺死後、光源氏の晩年まで持続していく。そこに光源氏の性格的問題があるというべきだろうが、夕顔に關しても、事は同様なのである。

光源氏は、夕顔頓死直後の反省時、夕顔頓死に至った夕顔との契りと、藤壺への不埒な料簡との因果を認識していた。だが、この因果の認識は、これ以後も保持されているのだろうか。この後、惟光の機転で、夕顔の遺体を東山の尼の庵に移し、二条院に帰った光源氏のもとに、東山から戻ってきた惟光は、気分がすぐれず自分もどうなるのかと思う、という光源氏に、かく言う。

「なにかさらに思ほしものせさせ給ふ。さるべきにこそよろづのこと侍らめ。人にも漏らさしじと思う給ふれば、惟光おりたちてよろづはものし侍り」など申す。「さかし、さみな思ひなせど、うかびたる心のすさびに人をいたづらになしつるかごとおひぬべきが、いとからき也。少将の命婦などにもきかすな。…」と口固め給ふ。

(夕顔一三一)

全て、前世からの因縁で、何ごともなるべくしてなっているのございましょう、と今回の事件について、惟光が言うと、光源氏は、そうだよ、だからそのように何もかも考

えようと思うのだけど、と答えた。この光源氏の言は、先ほどの「かかる筋におほけなくあるまじき心の報い」という認識と、ことばの上では矛盾しないが、一般的な仏教的因果の論理の中に藤壺とのことは、埋没している。惟光は光源氏と藤壺との秘密を知らないのか、知っているのか。

光源氏の手足となっている腹心の乳母子としてまずは知っていて当然のように思うが、知っていると断定もしがたい。明確なのは、光源氏が藤壺とのことは、ここでは口にしていないことだ。同様のことは、右近との對話の中にも見られる。九月二十日ごろ、某院での事件以来崩していた体調も全快して、光源氏が、夕顔の侍女右近から彼女の素性を聞くとところで、光源氏が、五条での夕顔とのそもその出会いを回想して言う、前掲の箇所に、

はかなかりし夕べよりあやしう心にかゝりて、あながちに見たてまつりしも、かゝるべき契りこそはものし給けめ、と思ふもあはれになん。またうちかへしつらうおぼゆる。かう長かるまじきにては、などさしも心にしてみてあはれとおぼえ給けん。

(夕顔一三八)

夕顔を自分でも不思議なほどに思い詰め、無理をしても逢瀬を持ったのも、夕顔との間にこうなる宿縁があったのだらう、こうして長く添い遂げることもできない宿縁だったのなら、なぜあれば私の胸にしみて、いとしいと思わ

れなさったのだらう、と。ここには惟光以上に絶対藤壺と
のことを知らせてはいけな右近がいて、やはり言葉の上
では藤壺への不埒な料簡の報いという認識と矛盾はしない
が、言葉遣いも内容も、夕顔の侍女右近を前にして、光源
氏と夕顔との二人の間の宿縁になりきっている。第三者の
僧たちがいる東山の尼の庵に、夕顔の遺体と別れを告げに
出向いた時の「いかなる昔の契りにか」（夕顔一三三）も、
なおさら同様である。

こうして、夕顔頓死時の、光源氏における藤壺との不埒
な料簡との報いという認識が、その後どれほどいつまで光
源氏の心中に保持されていたのか、明確でない。夕顔巻末
で語り手が、空蟬との交渉も含めて、「なほかく人知れぬ
ことは苦しかりけりとおぼし知りぬらむかし」（夕顔一四
六）と推量していたが、これも事情は同様であるし、反省
の見られない空蟬との交渉も含めた言であるので、なおさ
らそうした因果の認識からは遠のいている。この評は、空
蟬との再度の逢瀬に失敗して、代わりに軒端萩と契って帰
る時、老女と遭遇して秘密が露見しそうになった際、語り
手が、「なほ、かゝるありきは、かろぐしくあやふかり
けりと、いよくおぼし懲りぬべし」（空蟬九三）と評し
たことと対応しているだらう。光源氏が、反省時に気にか
けていた、一世源氏で帝寵が深く、左大臣の婿である自分

が、下の品の女と思われた、実は義兄弟の妾であった夕顔
と某院で密会して、彼女を物の気騒動で頓死させてしまっ
たという、醜聞の拡散も、東山での夕顔の遺体の処置を算
段した惟光が二条院の光源氏に告げた前掲の、「人にも漏
らさじと思う給ふれば、惟光おりたちてよろづはものし侍
り」の言どおり、惟光の至らぬ所なき機転によって、封じ
込められていく。光源氏の危惧は杞憂となるのである。

夕顔頓死時の、孤絶した異常な状況下での光源氏の反省
は、その後の惟光の支えなどにより、次第に意識が弱めら
れていくように見える。末摘花巻頭で「思へどもなほ飽か
ざりし夕顔の露におくれしこちを、年月経れどおぼし忘
れず」（二〇一）と、語られるような光源氏の夕顔への未
練は、「女はたゞやはらかに、とりはづして人にあざむか
れぬべきが、さすがにものづつみし、見む人の心には従が
はむ」（夕顔一四二）心を持っていた夕顔自身の魅力の他
に、こうした反省の意識の矮小化も関係しているのかもしれない、より根本には、女性に関する光源氏の「おほか
た名残りなきもの忘れをぞ、えしたまはざりける」（末摘
花二〇一）と評される性格に拠るであらう。

こうして、夕顔頓死時の光源氏の反省は、藤壺への思い
とともに起り、反省にも拘わらず、藤壺への思いが未永
く継続するように、夕顔への思いも後々まで持続していく。

こうした女性への思いが持続していくことが、その女性との交渉の反省自体を否定することにはならないのであろう。折口信夫と中本征利氏が光源氏の反省と認めた、若菜下巻での、女三宮と柏木の密通を知った後も、光源氏は、自身の密通の罪を棚に上げ、同様の罪を犯した女三宮や柏木に辛くあたったし、紫上の死後、紫上の思い出とともに、藤壺の思い出を、明石御方に表白してもいる。反省しても自身の感情の動きから自由ではない、まだ生の人間として光源氏は存在し続けているのである。

ともあれ、こうして、藤壺への思いが、光源氏の反省の大きな原因としてそもそも存在していることを知るのだが、光源氏の反省はすべて、藤壺、そしてそれと繋がる夕顔由来のものとして説明できるのであろうか。それについては検討すべき人も事件もいまだ多い。光源氏の人生は先が長いのである。

注

- (1) 『折口信夫全集』第八巻。
- (2) 源氏物語の引用は、『源氏物語大成』による。仮名遣いを訂し、漢字を宛て、送り仮名・濁点・句読点等を付し、文を整えた。漢数字は頁数。
- (3) 阿部秋生氏「六条院の述懐」（『光源氏論』）、拙稿「光源氏の述懐―御法巻と幻巻との間」（『京都語文』16、二〇〇九年

十一月）参照のこと。

- (4) 引用は、『国語国文学研究史大成3 源氏物語上』による。

- (5) 齊藤勇氏「『反省』の心理学」（『プレジデント』二〇〇二年七月一日）

- (6) 中本征利氏「源氏物語の精神分析学」三九五頁。

- (7) 三宅沙季氏「夕顔の死―帚木三帖の枠組みから―」（『日本文学論究』69、二〇一〇年三月）は、この箇所に関して、「藤壺との事件が『罪』だとすると、夕顔との事件は『恥』なのである」とする。「恥」の概念に検討が必要であろうが、身分を越えた女性への執着で人を殺してしまったことは、藤壺との罪と対応させられているように、やはり罪、誤ちであったとすべきだろう。

- (8) 拙稿「夕顔と紫のゆかりの物語」（『京都語文』11、二〇〇四年十一月）において、藤壺にも触れつつ、夕顔と紫上の関係について考えたことがある。なお、村井利彦氏「帚木三帖 仮象論 第二稿」（『源氏物語逍遙』）参照。

- (9) 細野はるみ氏「『おほけなき心』の系譜―源氏物語・夕霧と柏木の物語への一視点―」（『学芸国語国文学』32、平成十二年三月。）